

青森子猫物語

青森市
かつてに新聞部発行

その日の朝

2008年7月9日(水)のことであった。青森市新町に仮住まいしている私は、家内と二人で朝5時頃に我が家を出発し、人が殆どいない新町の朝の様子をうかがいながら、ニコニコ通りの朝市で買物をして、JR青森駅構内で旅行情報を見てから、青い海公園(ねぶた小屋裏)に向かった。散歩は朝の日課としているがコースを決めての散歩ではなく、その日の気分次第で毎日コースが変わる。また、雨・風の強い日は散歩をしないことに決めていた。朝の散歩は気持ちがいいものである。

1

朝の散歩することになったことには理由があった。主目的は体力の維持であるが、53才にして早期退職し、セカンドライフを歩むこととしたので、体力を維持させる一つ的手段として続けたいと考えていたからである。7月1日から無職となり、九日目の朝であった。

発見

2

JR青森駅から八甲田丸を見ながら木の橋を渡り、多くの人が釣りをしているのを眺めながら(小さい鯛が沢山釣れていた)、ねぶた小屋の裏手の岸壁の上の橋を渡っていると猫の鳴き声をした。最初はウミネコの声かと思った。複数の子猫の細かい、そして、死に掛けているような悲痛な声に聞こえた。時々途切れの隙間を順に見ていくと、今までに見たことのない恐ろしい光景を目にした。なんと、岸壁際の海の中から突き出ている



テトラポット

(海水から40cm程度)上に子猫が取り残されて鳴いていた。全身海水を被って、毛がギトギトになって、四本の足で踏ん張り、必死にしがみ付いていた。場所を変えて横から見ると更にもう一匹もテトラポットの上に取り残されて必死に泣いていた。直感的に助けたいと思った。しかし、そこまで行くだけでも、かなり危険である。50才前半の私はある程度体力に自信があると思っても躊躇した。少し上から見てみると60才台と思われるウォーキング中の男性が橋の奥から降りて行ってテトラポットを渡って助けようとした。凄い勇気ある人だなと思いい、救出されることを願った。

救出

3

軽やかに歩いて身が軽い人だから多分大丈夫だと思った。しかし、近くまで行けるものの、辿り着くまでに危険過ぎることから途中で断念し、引き返して帰ってしまった。見ている人は4人(自分・家内・ベンチで休憩中の二人)。ベンチの人に聞くと2〜3日前から猫の鳴き声が続いていたという。橋の通行者は少なく自分より体力がある人は、もう期待できないと考えた。危険はかなり大きい、自分がやるしかないと思っただ。家内には、ロープ・紐・釣で使う網など可能な限り使えそうなものを探してくるように行って行動を開始した。

橋の上から真下のテトラポットまでは2m以上の高さがある。直接行けないが、50m先まで歩いて行き、テトラポットとの段差が少ない橋の欄干の隙間から飛び降りた。猫が鳴いているところ迄近づくと連れて危険度が増して行くのが体感できた。

発見した子猫まで辿り着く途中に、テトラポット上になんと更に2匹いた(全部で4匹)。海水には浸っていないが、大きさは2匹とも同じく生後1ヶ月程度で同じ親の子と思われた。2匹とも目がヤニで覆われ、目が全く見えない状態であった。それでも近づいて声をかけると、猫特有の毛を逆立てて「フー」と泣き叫び、音がする方向に全身で威嚇行動をした。目が見えないから、大きな音は全て恐怖心に繋がっていた。コンクリート



のテトラポットにしがみ付き、落ちないで救出の叫び声を(2〜3日間も)発し続けていたことに感動した。この2匹は比較的手が届きやすい場所にいたため、引っかけられないように一匹ずつ捕まえて2匹を救出し、橋の上にいる人に渡した。

私が救出している間、家内は子猫のために119番通報していた。今まで119番をしたことがないが、あまりにも可哀想だから「救出していただきたい」と子猫のために携帯電話から119番した。緊迫した状況を説明し、返答を待ち侘びた。

しかし、素っ気無い返事が返ってきた。「危険ですから救出に行かないで下さい」とのこと。期待した自分が自己嫌悪になりそうな返事である。かなり離れた場所にいる多くの釣り人にも釣で使う網などを求めたが、誰も持ってきておらず、道具がみつからなかった。

3匹目は、テトラポットにしがみ付いている子であったが、海水を被っており、声がかれたのか「ヒーヒー」としか声が出せなかった。海から離れ小島のように突き出ているテトラポットには直接手が届かなかった。自分の体を両手で体重を支え、自分の足を投げ出してテトラポットにかけて、片手・片足状態になり。片手を伸ばし、猫も自分も危険な状態になったが、やっと捕まえた。捕まえた子を腿の上に仮置きし、体重を岸壁側に戻して両手で捕まえた。やっと助けたと思った。助けられた子は、全力を使い果たしたのか殆ど抵抗しなかった。

その後、橋の上から見えないところに1匹が新たに現れ、合計5匹を救出した。

5匹は目が見えない子も含めて体を寄せ合ってゆっくり逃げようとしたが、互いに離れないよう(兄弟愛)にしていたため、殆ど動かずにいた。たまたま、リュックの中にリュック用のレインカバーがあったので、5匹を入れたが、小さい体なので圧迫することなく収納できた。

救出したとき、目が見えない子猫が2匹、5匹全部が亀のように手足を動かさず腹を擦りながら、腰が抜けたように歩けない状況であった。臭いも海藻の腐ったような強烈な臭いであったが、幸い外傷はないようであった。恐怖におのいてブルブル震えていた。特に痩せた子はいなく、最近までの栄養状態は比較的良かったと思われ、最近まで人間に飼われ、目が見えない・運動機能が劣っていたこ

とから捨てられたのでは、と思った。

救護

4

とりあえず、体を洗って温めることが先決と思いい、近くの(人間の)クリニックに飛び込み、今までの状況を説明し、近くの動物病院の電話番号を調べていただき、事と子猫の体を洗っていただけませんかとお願ひしたところ、三人の関係者が応対してくれしたが、一人の女性が「怖い」と言って逃げ出し、残りの二人は無言であった。何回か説明したところ、タオル2枚なら差し上げることができる、とのこと。いただいたが、水道水で洗うことは体温低下となるので、可能な限りタオルで水分を拭き取り、次へと向かった。

近くに交番があることは知っていたので、交番に行つて相談することとした。交番に歩いて行く間も終始震えが止まらず小さな鳴き声を時々発していた。朝6時半であったが、ピンポンを押しても応答がなく、二回目で制服を着ながら現われたが、迷惑そうにしていたので、そのまま帰ることとしたら、隣の果物屋さんのおじさんに声をかけられた。動物病院であれば5分くらい歩けばあるとのことであった。交番との応対を聞いていて親切にしていた。

【決死の国道横断】案内されたとおり進み、跨線橋をわたり、散歩している人に場所を聞くと指差して動物病院を教えてくれた。見ると国道を渡った方向に看板があった。救出してから30分くらい経っていたので、子猫の状況から短時間で診てもらいたいと考えた。目で歩くルートを追うと信号のある交差点を2回と長い横断歩道橋を渡らなければならなかった。着くまでに長い時間がかかると思えた。

そして、家内に「いくぞ」と言った。家内は、危険と感じつつ、うなずいて付いてきた。片側3車線の国道7号線を6車線分走って渡ろうというのである。朝7時前の国道は、交通量は少ないものかなりの車が高速で行き交えていた。少し待つと両方向の車両が途絶えそうなきがきた。いくぞとばかり、5匹を抱え、ダッシュした。急いで渡って転ぶと危険なので、二人が離れないように走った。

やっと、渡り切ると、冷や汗がどっと出る思いがした。玄関のピンポンを押し、少し待っていると白衣を着た先生が現われ、助かったと思ったが、開口一番「電話してから来てくれれば良かったのに」とのこと。こちらから

ら状況を説明し、診てもらうことを願ったが、選択肢を二つ示された。①、この病院で診てから施設に預ける方法、②、最初から施設に預ける方法、である。何れも施設に預けると里親を探してくれるもの、三日くらい里親を探しても見つからない場合は処分されることであった。

そして最後に、青森どうぶつ福祉ネット「ワンニャンを愛する会」のボランティア組織に相談してみると良い、とのことであった。答えは決まった、これだと思つた。見ず見す処分される可能性があることよりも救える可能性が高いほうに向かうべきと考えた。決死の覚悟で救出し、決死の覚悟で国道横断し、最後に処分されるのでは自己嫌悪に陥るはずである。お礼を言って病院を後にし、タクシーに乗り、我が家に向かった。

【初風呂】泣き叫んでいる子の体を洗い流し、きれいにし、暖めてあげたいと思ひ、浴槽の洗面器に一匹ずつぬるま湯で洗つた。全身悪臭で漂っていた。海水の細菌が目・口・鼻・耳に付いて病気になることを願ひながら丁寧に洗つた。写真を撮ろうとカメラを向けたが、あまりにもかわいそうで理不尽なことをしている自分が情けないと感じ、2〜3枚撮つて止めた。写真を見るのと赤い目でこちらを見ており、人間を恨んでいるような気もした。

我が家には、昔の銭湯の脱衣かごがあったので、バスタオルを敷いて寝せた。あまり動く体力がないと見え、体を洗ってもらっているときも抵抗はしなかった。暖かい牛乳を与えると5匹は少し呑むと安心するかのようになり眠くなった。とりあえず、暗くして安心できるように照明を消して寝せた。心配なので30分毎に見に行つたが5匹とも起きもせず、しばらく休んだ。精一杯生きようとした子猫の努力に報わなければならぬと感じた。



【一休み後】五匹は、一休みすると、ゴソゴソ動き出し始めた。目ヤニの子2匹の目が少し開いていた。しかし、全部の子猫の目が見えているとは限らない。こちらの動きに反応できていない子もいた。全身の力を抜いて屈託のない寝姿の子もいて安心した。両手(前足)を誇らしげに前に投げ出し、スヤスヤ眠りから覚めない子もいた。手の大きさは、顔の大きさに比べると熊手のように大きく、この手だからこそテトラポット

のコンクリートに2〜3日もしがみ付いてくれたのかと思われた。野性的な手の爪は一度も切ってもらってことがないのか、鋭く伸びていた。私も救出後は、4日間位筋肉痛だった。(テトラポットでの救出)

【目薬】目の炎症を治してあげようとインターネットで猫用の目薬を探すと販売されていることが判明した。ペットショップに電話すると置いてあるとのこと、直ぐに買いに行った。低刺激性の炎症防止目薬である。

円らな目は小さく、片方の目に1滴目薬を垂らすと半分はこぼれた。そのくらい小さな目である。5匹には1回で10滴、1日3回点眼した。目ヤニは目を追う毎に少なくなったが、殆ど目ヤニが無くなった今でも毎日2回は点眼している。点眼は刺激が強いらしく、今でも嫌がっており、最大の抵抗を示す。全身を使って抵抗しようとする。愛の看護と思うが、子猫には通じないらしい。目薬タイムは、全員が「ブー」、「ギャー」と暴れる。5匹の目が見えたことに感謝したい。

【大変な一日】大変な一日であった。親の面倒を見る準備と自分のライフワークの時間を作るため35年間働いた会社を途中退職する道を選んだのに、退職9日目になって毎日自分を忙しくさせる子猫が現われた。暇にして暮らすのではなく、毎日忙しく生きなさいという教えなのかとも考える。人間のためにさえしたことの無い、初119番がこの子のために経験できたのも何の因果かとも思う。

子猫にするが大変な2〜3日であったろうことを思う。よくがんばつたと思う。また、この子達に自分の人間性を試されていることも感じる。自分が救出しなかったら、記憶から消すことができずに一生後悔していたのかもしれない。今日から扶養家族



が5匹増えた。

【トイレ】救出後は、日中ベランダ、夜中は浴槽の中で飼った。特に小さい体だから・夕方・早朝の目が届かない時間帯のカラス襲撃も考えた。ペットシートを最初に準備して便の処理を行ったが、さすがに5匹となると大小の便の量も半端ではなかった。可愛さ故、最初は便の処理も苦にならなかったが、臭いが大変であった。

迷うことなく、ベッド用トイレを購入した。最近のトイレは便利にできていると感じた。砂の代わりに木製ペレットを敷き詰める方式であり、大の処理・小の処理にかの工夫がされていた。

購入後、直ぐに5匹をトイレの中に入れて見せた。何とかトイレ以外に排泄しないよう願った。翌日の朝見てみると、特に教育や講習会を開いた訳でもないのに大の方は完璧にトイレの中でしていた。これには感動した。しかし、小の方はマスターするの二日目目があった。

さすがに5匹いるとトイレも大変である。同じ時間に起きて・食・べて・遊んで・寝てを繰り返すと同じ時間に排泄もするようになっていた。その時間になるとトイレが渋滞し、順番待



兄貴のウンコの始末も丁寧に。走ると早い（次男）



ブルーな瞳がキラキラ輝くシャム系美人（長女）



臆病だが、網戸最上段まで登るシャム系ハーフ（次女）



目ヤニも直って急成長。小柄なシャム男児（三男）



ウンコの後始末を時々忘れる。元氣一番（長男）

ち状態になっていた。また、便の臭いがすると他の子も尿意をもよおすのかもしれない。待ちきれず場外にフライングしたことも1回あったが、ほぼ完璧である。
トイレ後の便を隠す仕草（我が家では耕すと言っている）も可愛く、誰に教わったわけでもないのに大をする毎に畑を耕している。時々忘れる子もいて、次の子が被せてあげているのを見ていると面白かった。

【遅い昼ごはん】飼ってから段々元気になって、慣れてくるとあまり手がかからないと感じるようになっていた。5匹いると勝手にじゃれあって疲れると眠るという繰り返しで、こちらが心配するよりも安心できた。

食事の時間と量も変えないようにしていた。5匹が扶養家族になって、昼は外食しないようにしていたが、たまに外食したときに、その食堂が混んでいると14時頃に帰ってくるのがあった。食堂の中の会話では、子猫たちが「今日は、昼ごはん遅いな」とか「猫の介護士失格だな」とか「最近、育児がテキトーだな」とか言われているんじゃないかと思ひ、二人で笑うこともあった。

ボランティアに感謝

5

【ボランティアとの出会い】

猫の里親探しについてインターネットをチェックしていると、7/13に青森市でワンニャンの里親を探すイベントがあることが判明した。早速メールすると返事があり、開催日当日にもかわらず対応していただいた。青森どうぶつ福祉ネット「ワンニャンを愛する会」である。

電話で事情を説明すると、返答の話の中では有り得ない言葉が返ってきた。「救って下さって本当にありがとうございます」と。今の人間社会では、他人の殺人はもとより家族の殺人・誰でも良かった殺人・自殺が横行し、命など大事にすることなど考えにくい事件が多発しており、命を大事にしよという気持ち希薄になっているのを感じる。

今迄対応した119番・交番・動物病院の方々と全然違う種類の返答であった。このボランティアの人達が消えゆく命を救っているんだと思った。

里親を探すコーナーでは、一番体が小さいせいもあって、皆さんからカワイイと言ってくれた（親バカかも）のはうれしいが、内心寂しかった。

【里親みつかる】生後1ヶ月の子猫と約1ヶ月間共に暮らし。この間の成長は著しく、ジャンプカ・猫パンチ・猫キックも発達し、網戸も最上部まで登れるようになり、顔も段々と

大人顔になってきた。（網戸の網もブカブカに緩んできた。ドリーヨ）

救出後の我が家は子猫の育児を中心にした生活になっており、苦勞しただけに里子に出すのは辛い、アパートの契約上致し方ないことである。早く里親が見つかってほしい反面、里子に出したくない気持ちも強かった。皆様の情熱とご好意により、里親が見つかるに連れ、一匹ずつ減り、ついに5匹全部の里親がみつかった。我々が一番望んでいたことと、望みたくないことが同時に起こった。さすがに最後の日は辛かった。……………約1ヶ月間でしたが、この子達から充分な幸せをいただきました。

【生きたいと思う子猫の叫びと偶然】

5匹の子猫と暮らし、今は夫々が新しい家族の元へ引き取られ、今は生活の一部が空っぽになった気がするが、この一ヶ月間を振り返ると、

- ①. 子猫の気力・体力がなかったら
- ②. 途中退職の決意がなかったら
- ③. 天候状態が良く、散歩を考えなかったら
- ④. 救出するときに無理だと思ふ気持ちが強かったら

この全部の条件が揃った少ない確率の中で、助かったのだから、子達が今後も幸せになってもらいたいと願う。

全身の力を振り絞った努力は報われるし、また、報われなければならぬと思う。小さな体に宿った魂でも生きる価値はあり、危険な状況からでも救い出し、生かす価値はあると考えた。

人間も動物も命を粗末にしたり、命を捨てることは、あってはならないことである。

【最後に】

里親を探すにあたり、「ワン・ニャンを愛する会」「ホームマック東青森店」さんなどを通じて数件の問い合わせをいただき感謝しております。（インターネットを通じて四国からも問い合わせがありました）

今後、この子猫達を育てることなどを通じて、周囲のお子さんなどに「命の大切さ」を実感させて、共に生きること、命のつながりを感じていただければ幸いです。子猫も回りの人間も幸せになることを祈ります。